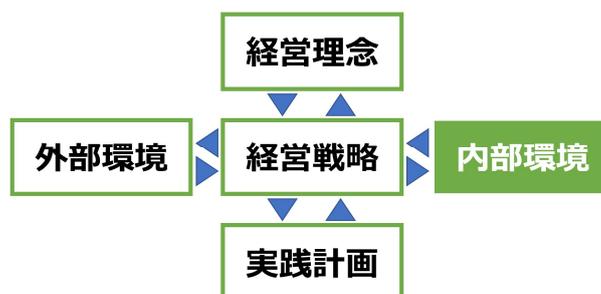


「内部環境」を考える・その2

企業経営漫談士 岡野実空

「内部環境」の後半は、「ヒト」を除く「経営資源」、すなわち「モノ」「カネ」「情報」などの考察。但し「モノ」については前回も触れましたので、今回は「カネ」と「知識」を中心に考えます。これらはいずれも、インターネットの登場で状況が最も大きく変化した経営資源。その認識や取り組みの差が、そのまま現在の企業間の優劣につながっています。しかしよくよく考えてみると、その差も「ヒト」が生み出したもの。改めて、「経営はヒトに始まり、ヒトに終わる」ことを痛感します。



其の3：『銭見之明』

いま企業の戦場は、「ビジネスモデル」にあり！それは対象とする「顧客」と提供する「価値」という要素に、「収益」という商いの不可欠な要件を加えた事業の仕組みです。激動の時代を生きるには、関与するメンバーがそれに知恵を出し合い、「ワンチーム」で行動して、社会の変化に即応していくしかありません。また社内外の「先見之明」に耳を傾け、ときには既存の仕組みを諦め、新たな「ビジネスモデル」に転換していく必要があるのです。

もちろんそれにはさまざまな難関が待ち構えており、その挑戦が頓挫した事例は枚挙にいとまがありません。その中でも特に目を引く挫折の原因は、上記3番目の要件である「収益」や「資金繰り」の見込みの甘さです。そこから見えるのは、「根拠なき楽観」だけでなく、「カネは卑しいもの」という近世以来の偏見による、事前の検討不足。偉人・渋沢栄一翁が『論語と算盤』という意識変革を懸命に訴え続けたものの、いまだに私たちの心の奥底に潜み、その十分な議論や精査を妨げています。因みに2500年前、すでに商業が発達していたインドに生まれた仏教は、それとは対照的に、当初から交換の手段として「カネ」の社会的な価値を認めてきたのです。（利子や蓄財は否）

以上のことから明らかなように、企業が「ビジネスモデル」という日進月歩の戦場で生き残るには、一部の人間の「先見」性ばかりでなく、多くの組織人の『銭見之明』が必要とされるのです。

其の4：『浅学被災』

原語の「浅学菲才」とは、学問が浅く、才能にも乏しいこと。自らを謙遜して使う熟語ですが、現在使われる状況は、ほとんどが真逆。適切な場で使わないと、こんな難しい熟語も知っているという自慢になり、響きを買うだけに終わります。また聞き手が意味不明で、空振りも頻発。そんな情けない現状を表すのが、『浅学被災』。先般、「鯛は、頭から腐る」という言葉を知っているか？という質疑でもめた国会は、その良い？見本です。「正しい『魚は、』なら知っています」で返し技一本！のところ、「浅学」同士の泥仕合となり、私たち国民が税金と時間の無駄遣いで「被災」してしまいました。

しかしいま、それを経済人は決して笑えません。その知識は「実学」ばかり。基礎となる「一般教養」や革新のヒントとなる「雑学」にはまったく無関心。そんなビジネス「三学」のバランスを欠いたトップの下にしながら、皆さんミドルがそれを補完できないと、現場のモラルが崩壊し、不祥事多発という『浅学被災』で、企業は頭から尻尾まで腐ります。

元祖「三学」とは、仏教の「戒定慧」。「戒」戒律を守り、「定」精神集中して、「慧」真実を知るための実践修行のこと。企業に置き換えれば、堅固な「ガバナンス」の下で、的確な「マネジメント」が行われ、しっかりその「社会的責任」を果たすことです。但し仏教とは違い、「お陀仏」が許されないことをお忘れなく！南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏！！

2020年2月24日 実空